



近江聖人中江藤樹

近江聖人中江藤樹記念館

館長補佐 中江 彰

はじめに

滋賀大学附属図書館が同館教育学部分館所蔵の約8,500冊におよぶ旧教科書（明治～昭和20年）に登場する滋賀県関係の歴史人物を調べたところ、第1位は「中江藤樹」の88回、第2位は「井伊直弼」の35回、第3位は「石田三成」の29回というように、いかに中江藤樹が旧教科書のなかで多く登場していたかが知られます。そして、中江藤樹の登場する旧教科書の科目別内訳としては、「修身」が51回、「歴史」が25回、「国語」が11回、「唱歌」が1回というように、とりわけ修身教科書において多く登場していたことがわかります。また、中江藤樹がもっとも頻繁に登場する時期は、明治20年代から30年代にかけて出版された教科書で、全体の7割強にも達します。

このような附属図書館の永年にわたる地道な調査とその惜しまぬ公開によって、われわれはわが国の草創期における近代教育に取り上げられた歴史人物のなかで、中江藤樹が大きな比重を占めていたことを、いとも容易に知り得るのです。

ところが、その反動のためか、戦後、中江藤樹は忘却のかなたへと追いやられ、新教科書にはほとんどといっても過言ではないほどに、登場しなくなりました。それゆえ、戦後教育をうけた人たちにとって、中江藤樹に関する知識は、おそらく日本の陽明学の開祖という程度ぐらいで、それ以上の多くを知らないと思います。はたして中江藤樹は、思想的にもまた行動的にも、いわゆる国家主義の時代にふさわしく、民主主義の時代にはふさわ

しくない人物だったのでしょうか。さらには、中江藤樹はあたかも“孝行の権現”のごときイメージで見られていますが、本当にそうだったのでしょうか。



紙本著色中江藤樹像（藤樹書院蔵）

儒学者としての藤樹

そこでまず最初に、中江藤樹（以下「藤樹」と略す。）について百科事典的説明をしてみます。1608－48。江戸初期の儒学者。わが国における陽明学派の開祖。数多くの徳行、感化によって、没後に《近江聖人》とたたえられる。近江国高島郡小川村（現滋賀県高島郡安曇川町上小川）に生まれる。名は原、字は惟命、号は嘿軒または顧軒、通称は与右衛門。藤樹とは号でなく、居宅に生えていた藤の老樹から、門人が《藤樹先生》とよんだ尊称に由来する。9歳、米子藩主加藤貞泰の家臣であった祖父中江吉長の養子となり、米子そして伊予大洲に移り住む。15歳、祖父の死去により百石取りの武士となる。17歳、独学で『四書大全』を読み朱

子学に傾倒するが、33歳のとき『王龍溪語録』を、37歳のときには『陽明全書』を入手、熟読して、おおいに触発感得をうける。これまでの学問上の疑念が解け、格法主義的な生活の非なることを知り、しだいに陽明学へと信奉していった。27歳のとき、母への孝養と自身の健康を理由に大洲藩士の辞職を願い出るが、許可を待たずに脱藩して、小川村へ帰る。浪人となった藤樹は、居宅を私塾として開き、亡くなるまでの14年間、数多くの門人を育てる。その代表的門人に、熊沢蕃山・澗岡山・中川謙叔・泉仲愛らがいるが、とりわけ蕃山によって藤樹の名声を一段と高めた。また、魯鈍の門人大野了佐に対して、大部の『捷徑医筌』を著わし、それをテキストにして医書を教え、立派な一人前の医者に育て上げた逸話はあまりにも有名。おもな著書に、『翁問答』『鑑草』『孝経啓蒙』『論語郷党啓蒙翼伝』『論語解』『大学考』『大学蒙註』『大学解』『中庸解』などがある。



真蹟「大学解」（藤樹書院蔵）

以上のことから、なによりも藤樹が儒学者であった、ということに認識する必要があります。ただ、儒学者といいますと、われわれはどうしても封建思想の信奉者、封建社会の為政者というマイナ斯的な印象で見えてしまう傾向にあります。たしかに、林羅山にはじまる「林家」などは、江戸幕府に仕えて、朱子学の《敬》による封建的、階層的イデオロ

ギーの推進者であったことはいうまでもありません。けれども、藤樹のばあいは、湖西の草莽の地「藤樹書院」を発信基地として、いわば“儒学ルネサンス”を提唱し、広くおよぼそうとしたのです。

いったいに、儒学は「孔孟の学」ともいわれるように、紀元前の古代中国の思想家・孔子と孟子とによってとなえられた学問であり、その目的は《修己》と《治人》、つまり自分自身を立派に修養する道德と人民をおさめる政治、この二つに力をつくすことによって、古代の聖天子・堯や舜がおこなった道德的な理想社会の実現ができるのだと考えました。

「人間の本性は善であると説き、説くたびに必ず聖天子の堯と舜とを引き合いに出して、誰でもそのようになれるものであると力説した」

ここには、有名な孟子の《性善説》を述べているところですが、孟子は人間の本性は善だという不動の信念にたって、戦国時代の諸侯たちに対して武の政治ではなく、人民とともに楽しむ《仁義》にもとづいた王道政治の重要を、さかんに説きました。

じつは藤樹も、まったくいうぐらいに、この孟子の《性善説》と同じ人間観にたった思想家でありました。このことは、門人あての書簡のなかに見い出すことができます。たとえば、34歳のときの書簡には、

「人の本心は善にして悪なし。(中略)これすなわち固有の良知にして人々皆しかり」とあるのがそれです。また、40歳のときの書簡にも、

「良知すなわち善なり。良知に致れば善は常に心のあるじたり。(中略)良知を善の本体として、良知にそむくを悪の本色とする精義をよく御わきまへなさるべく候」とあって、孟子の《性善説》からさらに思索を深めて、王陽明の《致良知説》と融合発展していったことがわかります。したがって、藤樹が儒学者とよばれるゆえんは、ここにあ

るといえます。

それと、もう1点だけ言及しておきますと、日本の中世、ことに戦国時代末期ごろの儒学を知るのは、せいぜい京都五山の禅僧あるいは戦国の武将など、ほんのひと握りの人たちでした。彼らは、あくまで個人の教養もしくは精神的なよりどころとして「四書五経」を読んでいたわけで、それを積極的におし広めようという意識は、ほとんどなかったように思われます。一方、おおかたの民衆はというと、藤樹が大洲の門人中川貞良の老母にあてた2通の書簡に、

「後生のこと一大事と思し召す由、御尤もに存じ候。後生一大事なれば、今生なお一大事にて御座候」「仰せ下され候ごとく後生一大事に御座候」

とあるような、他力の諦観的な仏教信仰が、生活のなかに深く入り込んでいました。そうした当時の社会背景において、孟子の《性善説》に依拠するとはいえ、藤樹がおそらくわが国ではじめて、上下尊卑の身分観念にこだわることなく、すべての「人間の本心は善だ」と高らかに首唱したのですから、じつにセンセーショナルな宣言だったといわざるを得ません。

藤樹の儒学観

近世以前のわが国に流布していた儒学について、藤樹はどのような評価を与えていたのでしょうか。これは、藤樹の歴史観を知ることにも通じるのですが、藤樹は『翁問答』上巻之本のなかで述べています。すなわち、先進国の中国におこったいろいろな思想・宗教のうち、

「日本へ流伝してひろまりたるは、俗儒と仏氏と二いろなり。ふたつのうちにて、世ぞくのもっぱらがくもんといへるのは、俗儒の記誦詞章也」

といい、儒教と仏教の二つだけが、結局はわが国で広く永く伝わった、というのです。ところが、藤樹はそのような中世までの儒教を

《俗儒》という言葉で一蹴しました。俗儒とは、ただ「四書五経」の書物を読んで、字句の解釈や、美しい漢詩文をつくったり、丸暗記ばかりにエネルギーを費やして、博学多才を誉れとする儒学者のことをいいます。そして、俗儒のおこなっている学問は《にせ学問》でなんの益にもならない、とまで藤樹はいつています。もっとも、この「俗儒の記誦詞章」という表現の仕方は、藤樹の発明ではなく、朱子の「大学章句序」にあり、それを引用したものと思われます。

これに対して、藤樹は《真儒》という言葉を持ちいて、わが国においてこの真儒とよばれるような儒学者は、過去ついに現われなかった、というのであります。藤樹は、おそらく教えて倦まない聖人孔子と門人たちの、日々の生き生きとした教育風景のなかに、儒学の原点があると考えたのでありましょう。

藤樹がまだ大洲藩士であった23歳のときに著わした「安昌、玄同を弑するの論」と、24歳のときの「林氏、髪を剃り位を受くるの弁」には、林羅山一派の儒学に対して、痛烈に批判しているのをうかがうことができます。

良知に致る心学



国史跡藤樹書院跡

それでは、藤樹は私塾・藤樹書院において、どのような儒学を打ち立てようとしたのでしょうか。それは、ある意味では林羅山へのおおいなる挑戦ともみることができますし、少

なくとも大洲在藩時代の藤樹には、そういう気概がはっきりと出ていました。

藤樹が首唱した儒学とは、すなわち《心学》でありました。《良知に致る心学》あるいは《良知心学》といえるでしょう。

「聖賢、四書五経の心をかがみとして我心をただしくするは、始終ことごとく心のうへの学なれば、心学とも云なり。此心学をよくつとめぬれば、平人より聖人のくらゐにいたるものにて候ゆへに、また聖学とも云なり」(『翁問答』)

この《心学》に対峙するのが《口耳の学》とよばれるもので、耳で聞いたことを心解せずに、すぐ口に出すうすっぺらな学問のことをいいます。それゆえ、藤樹にとっての学問とは、

「心のけがれをきよめ、身のおこなひをよくするを本実とす」(同上)

でありますので、「四書五経」を読むのも、それはあくまで自分に内在している《良知》にいたるための一つの手段に過ぎないのです。そのためには、まずみずから主体的に《志》をたてることが先決だと。もし、《良知》にいたることが難しいという人がいるとすれば、それは《志》をもっていないから、と藤樹はいいます。また、《良知》にしたがうのが難しいというのは、それは私欲にくもらせているため、ともいいます。

もともと中国の陸象山・王陽明らが提唱した《心学》を、藤樹はわが国でいち早く首唱したわけですが、この《心学》それ自体の歴史的意義については、「何よりもその良知心学が人に生きる力と喜びを覚醒させた」という吉田公平氏(中国哲学史)の文章に、すべてを言い尽くしていると思います。

むすび

藤樹は、近江の草莽の地で、持病の喘息とたたかいながら、41年の短い生涯を終えました。儒学者藤樹の歩んできた人生について、相良亨氏(日本倫理思想史)は「朱子学から

脱出して己を発見する一生だった」といいました。私は、次の藤樹のつくった和歌が、その答えを見つけるひとつの手掛かりになるものと思います。

「いかで我こゝろの月をあらはして

やみにまどへる人をてらさむ」

この「こころの月」とは《明德》であり、《良知》であり、《心学》を意味します。要するに、藤樹は世間一般にいるような、博識を誉れとした、観念の世界の学者ではなかったのです。仏教の言葉をかりますと、それは利他の行為であり、菩薩の精神に近いものを感じとれます。



中江藤樹墓所(安曇川町大字上小川)

大洲からやってきた大野了佐ひとりのために、藤樹は精根尽き果てるほどのエネルギーで医書を教えました。ところが、まわりの門人たちは、その行為をねたむのですが、藤樹は逆に門人たちを叱責します。このような一例からもわかるように、目の前のひとりの人間を大切に育て導くという利他の実践、その根源にはすべての人間に有する《善》への藤樹の絶対的な信頼を、垣間見ることができるのです。

滋賀文化財教室シリーズ No.185号

発行年月日 1999年12月1日

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2

TEL (077) 548-9780 FAX (077) 543-1525